

## 学位請求論文審査報告書

氏名 廣田 至  
論文題目 親鸞の聖徳太子観  
審査委員 主査 大谷大学教授 一楽 真  
                  博士（文学）[大谷大学]  
          副査 大谷大学教授 井上 尚実  
                  Ph.D. [University of California]  
          副査 大谷大学教授 東館 紹見  
                  博士（文学）[大谷大学]  
          副査 大谷大学名誉教授 藤嶽 明信

### I. 論文内容の要旨

本論文は、親鸞が聖徳太子をどのように見ていたのかを明らかにするために、親鸞が遺した聖徳太子に関する著作を網羅的に取り上げて考察した論文である。本文 190 頁、註 45 頁からなっている。

これまででも、また現在でも、聖徳太子に対する見方は様々で、実在そのものを疑う人もある。論者は実在か不在かを確かめようとする立場からではなく、後世の人が受け入れ信仰してきた聖徳太子について尋ねようとしている。それは、親鸞が生涯を通して聖徳太子を讃仰し、著作も残しているからである。この論者の立場は、近年、遠藤美保子氏が提示した「親鸞には聖徳太子信仰はなかった」という説に対立するものである。それ故、論者は遠藤氏の所論を検討する形で論を進めるとともに、反論を加えている。反論は大きく三つにまとめられる。

一つは、六角堂の参籠が聖徳太子信仰と関係していること。

二つは、『七十五首和讃』『百十四首和讃』は親鸞の著作であること。

三つ目は、親鸞の太子信仰が晩年になってから顕れたものではないこと。

である。この検討をする中で、論者は親鸞思想研究が『教行信証』に重点が置かれてきたことに疑問を投げかけ、親鸞の聖徳太子観の研究がなされてこそ、親鸞思想の全体を把握することになるという問題を提起している。

全体の目次は以下の通りとなっている。

### 序

#### 第一章 日本仏教における聖徳太子信仰

##### 緒言

第一節 『日本書紀』における四天王寺と法隆寺の記述の違い

第二節 聖徳太子の生没年について

第三節 聖徳太子の名前について

第四節 南岳慧思後身説 小野妹子法華経将來說

第五節 観音菩薩化身説—『聖徳太子伝暦』を中心に—

第六節 聖徳太子未来記

第一項 『四天王寺御手印縁起』について

第二項 「聖徳太子御記文」について

小結

## 第二章 親鸞における夢告の意義

緒言

第一節 三夢記について

第二節 六角堂夢告について

第一項 吉水入室と六角夢想の年次について

第二項 六角堂夢告－聖徳太子の文と御示現の文について－

第三項 六角堂参籠の意義

第三節 『正像末和讃』と夢告讃の関係について

第一項 『正像末和讃』の構成と内容

第二項 夢告讃－夢告の教主について－

小結

## 第三章 聖徳太子和讃の書誌的考察

緒言

第一節 聖徳太子和讃の真蹟について

第二節 聖徳太子和讃に関する書写本の整理

第一項 『皇太子聖徳奉讃』（七十五首）の書写本

第二項 『大日本粟散王聖徳太子奉讃』（百十四首）の書写本

第三項 『皇太子聖徳奉讃』（十一首）の書写本

第三節 聖徳太子和讃における「ヲ」の仮名遣いについて

第一項 先行研究の整理

第二項 『皇太子聖徳奉讃』の「ヲ」の仮名遣いの調査

第三項 『大日本粟散王聖徳太子奉讃』の「ヲ」の仮名遣いの調査

小結

## 第四章 親鸞の聖徳太子観－聖徳太子に関する和讃を中心に－

緒言

第一節 聖徳太子和讃制作当時の親鸞の周辺状況

第二節 『皇太子聖徳奉讃』（七十五首）について

第一項 『皇太子聖徳奉讃』の典拠と構成

第二項 『皇太子聖徳奉讃』における聖徳太子観－物部守屋との比較から－

第一目 親鸞の聖徳太子観－『皇太子聖徳奉讃』を中心に－

第二目 親鸞の物部守屋観－『皇太子聖徳奉讃』を中心に－

第三節 『大日本粟散王聖徳太子奉讃』（百十四首）について

第一項 『大日本粟散王聖徳太子奉讃』の典拠と構成

第二項 『大日本粟散王聖徳太子奉讃』と『上宮太子御記』の比較

第四節 親鸞の聖徳太子観の系統

第五節 『皇太子聖徳奉讃』（十一首）について

第一項 廟嶺偈と『涅槃経』文の意義－『皇太子聖徳奉讃』『大日本粟散王聖徳太子奉讃』から『皇太子聖徳奉讃』への展開を踏まえて－

第二項 和国の教主と和国の有情

第一目 和国の教主－教主の用例－

- 第二目 末法の教主と像法の智人
- 第三目 和国の有情—衆生から有情へ—
- 第三項 観音勢至と弥陀の現れ—聖徳太子と法然を中心に—
  - 第一目 観音菩薩の化身としての聖徳太子と勢至菩薩の化身としての法然
  - 第二目 阿弥陀の顕現としての聖徳太子と法然—廟崛偈の表現を通して—
- 第四項 聖徳皇と上宮皇子の名について

小結

結

各章の内容について、以下に簡単にまとめておく。

第一章は「日本仏教における聖徳太子信仰」という題で、日本仏教において聖徳太子信仰がどのように勃興し、展開したのかを確かめようとしている。それを通して、親鸞の聖徳太子観が何に影響を受けているのか、また如何なる特色があるのかを浮き彫りにしようとしている。『日本書紀』に始まる太子信仰が、法隆寺と四天王寺という二つの寺院が中心となり、それぞれの太子観をもっていく流れを論者は追っている。そして親鸞が生きた鎌倉時代には、四天王寺が太子信仰の寺院として評価が高かったことを押さえている。

第二章は「親鸞における夢告の意義」と題し、親鸞にとって聖徳太子の夢告がどのような意義をもつかを尋ねている。その際に、まず高田専修寺に所蔵される『三夢記』の検討を行い、後世の偽作と見ている。そして、史実として認められるのは二十九歳時の六角堂夢告と八十五歳時の夢告讃とした上で、この二つの夢告の内容について考察を加えている。

六角堂夢告については、『親鸞伝絵』の記述が『教行信証』および『恵信尼消息』と異なっていることを取り上げ、まずは吉水入室の年を確定している。その上で、六角堂を「仏法最初のところ」と述べる親鸞の意図を推測し、聖徳太子に仏法興隆の真義を問うたのが六角堂参籠であり、法然のもとへ赴く原点になったと論じている。

夢告讃については、夢告の主が聖徳太子であると見定めるとともに、その背景には法然の存在があることを見ている。この時期に聖徳太子に関する著作を制作するととどまらず、『西方指南抄』や『選択集』を書写していることへの注意が必要であると述べている。

第三章は「聖徳太子和讃の書誌的考察」という題で、親鸞の三種の太子和讃について、まず書誌の検討を行っている。三種とは『皇太子聖徳奉讃』（七十五首）、『大日本粟散王聖徳太子奉讃』（百十四首）、『皇太子聖徳奉讃』（十一首）である。これらのほとんどは真蹟が伝わっておらず、書写本しかないために、親鸞の著作であること自体が疑われる要因にもなっている。「七十五首和讃」について論者は、恵空書写本が他とは異なる内容をもっていることに着目し、江戸時代の写本であるが原型に近いのではないかと推測している。

また論者は、親鸞の仮名遣いの中で、特徴的な「オ」と「ヲ」の使用例を調査し、「七十五首和讃」「百十四首和讃」が親鸞の著作であることを論証しようとしている。

第四章は「親鸞の聖徳太子観—聖徳太子に関する和讃を中心に—」と題し、これまでの考察を踏まえて、親鸞の和讃の内容を検討している。まずはそれぞれの構成と典拠を確かめ、その上で撰述の意図を尋ねている。そして、「七十五首和讃」「百十四首和讃」から「十一首和讃」への展開を見て、親鸞の聖徳太子和讃の深まりについて述べている。その中で論者は、「十一首和讃」は太子伝など依拠するものはないと言われてきたが、「廟崛偈」からの展開が窺えるとして、両者の関係について考察を加えている。

最後の結では、論者が考察の端緒とした遠藤説についての批判をまとめた上で、親鸞にとって聖徳太子は発遣の教主であり、著作上に顕れるのは晩年であっても、若い頃から一貫して崇敬の念があったと述べる。それ故に、聖徳太子は親鸞をして親鸞たらしめた存在であり、『教行信証』などの著作を生み出す母胎のようなものであったと結論づけている。

## II. 論文審査結果の要旨

本論文は、親鸞の聖徳太子に関する著述を網羅的に押さえ、読み解こうとした意欲的な論文である。特に、親鸞思想研究が『教行信証』に重点が置かれてきたことに対し、それだけで果たして親鸞思想の全体を把握できるかという疑問から、親鸞における聖徳太子観の研究を進めようとしたことは、独自の視点に立って新たな親鸞研究の方途を探ろうとする取り組みであると言える。また、書写本しか残されていない著作について、親鸞の仮名遣いに注目することにより、親鸞のものかどうかを決定する方法は、独自の新しい視点を与えている。また、先行研究に関しては、最新のものまで目を通し、その上で自分の見解を提示しようとしていることは、論者の熱意の表われである。

口述試問においては、課題となる点、また不十分な点などについて確かめた。そのすべてについて挙げることはできないが、以下に主なものだけ記す。

1、資料の扱い方として、原典の引用は正確さが求められる。読みやすさを考慮して書き下しにしたのかもしれないが、解釈が入ってしまう。それが、先行研究によるものか、また論者自身のものかが分かりにくい箇所もある。注記も含め、明確に分かるようにする必要がある。

2、資料の基礎的な検討は大事であるが、それに注がれた枚数に比して、内容について考察する割合が少ない。特に本論の中心となる第四章は十分であるとは言えない。

3、遠藤氏の所論について検討するのであれば、その一々について吟味する方が良かった。自分の気になった点だけを取り上げているようにも見える。もっと丁寧な論証が求められる。

4、三種の太子和讃について撰述の意図、その展開を見ているのは大切である。ただ、論者が重要な契機としている善鸞事件と、聖徳太子および法然とのつながりは分かりにくい。さらなる論証が必要である。

以上のように、論者の論考に対して議論が交わされた。今後さらに検討されるべき問題は多いが、これも論者の網羅的な資料検討があっただけに見えてきた課題である。論者の論考を通して、考察すべき問題点が明確になったと言える。その意味で、親鸞の太子関係の資料を渉猟し、親鸞にとって聖徳太子がどのような存在であったかを明らかにするというという主題について、本論文は優れていると言える。博士の学位請求論文としての要件は十分に満たしている。

審査に必要とされる最終試験については、審査員全員により 2022 年 1 月 12 日に試問を行った。その結果、審査員一同一致して、廣田至に大谷大学博士（文学）の学位を授与することが適当と判断した。